筆道要法

完

特42
247

071469-000-5

特42-247

筆道要法

原田　竹外／著

M26

CED-1081

古曰書足以記名姓世假爲藏拙遁辭余謂不然其文下有劒一人敵之語蓋擊劒技精畢竟不過兩人決雌雄也推此意則書雖巧妙其用纔可供記名耳如此解去而始可與言史已矣余曩著古器用考知有登登兩字登瓦豆以薦大羹者登本豆跗後爲燭器字又作鐙而段氏注說文尚爲無登登之別嗚呼字義之不講字體之不詳如此夫戎邦近來泰西學術大行上

特42
247

續可供記名耳如此解去而始可與言史已矣
余藏者古器用者知有登登而字登瓦豆以藏
本豆跗後為燭器字又作鐙而段氏

古曰書足以記名姓世假為藏拙遁辭余謂不然其文下有劍一人敵之語蓋擊劍技精果決不過兩人決雌雄也推此意則書雖巧妙其用注說文尚為無登登之別嗚呼字義之不講字體之不詳如此夫或邦近來泰西學術大行上

下摹效如書法。束之高閣。殆無省者。然此等人至揭門票。則火倩良書家。書之。所謂足記名者。豈是歟。原田竹外。撰速成習字法。其法極親切。初學由是而學篆。字格結體。庶乎其不差矣。及刻成。爲弁一言。

明治壬辰天長節

如電居士大槻修 卍

竹外原田真一著 圖

余武藏府中人名眞字成美。號竹外。又六書居士。原田氏。資性任放。不拘小節。亦好諧謔。饒舌縱談。嗜鐵筆之技。家素塾師。幼而修所謂御家流書法。不成專修讀書。又不成。是時菱湖卷先生之書大稱于世。一日熟覽其遺墨。豁然有所悟。學之數月。頗覺有心得焉者。既而時勢一變。洋學頓盛。乃負笈東京。歲餘蕩竭行槖。纔寄拙文於新紙。以支衣食。會母病。倉皇還家。病終不起。自是大悛性行。一意學書。襲家學來乞教者漸多。丁丑舉鄉學校長。尋爲學吏。居三年。辭職。從事商業。會計不當。明治十九年。再出府下。僑居于

大槻先生淺草邸。欲以書開業。斯道時義。不足糊口。
旁業鉛槧。其所述二十有餘種。就中通俗萬國通鑑。
東京遊覽記。政治家列傳等。行于世。去歲辛卯六法
諸子相謀。將振興書學。使余當其事。余不敢辭。拮据
鞅掌。晨昏期其成焉。今臨此編。追想往昔。則豈又遇
然也哉。

明治二十五年九月

筆道要法

總論

竹外原田眞一　纂述

抑モ書ハ、經國ノ要道人生ノ用具ニシテ、東洋美術ノ家ニ於テハ言ヲ俟タズ、夫レ已ニ言語アルヿハ文字ニ依ラザルヲ得ズ、文字ヲ用ヰバ、字格ハ結構其正シキヲ講ゼザルベカラズ、之ヲ講ズル云フ、此法タル、古ヘヨリ相傳フル所ノモノアリト雖モ、其敎フル所ハ、大率高尚ニシテ、幼童初學ノ容易ニ會得スベカラザルモノ多シ、

東京帝國大學圖書之印

且ツ徒ニ其法ニ拘泥シテ、活用ニ供スル能ハザル、往々ニシテアリ、況ンヤ今日修ムル所ノ學業、日ニ月ニ増加シテ、習字ノ一科ヲ專修スル能ハザルニ於テヲヤ、而シテ小學科中尚重位ヲ占ムルハ、蓋シ日用缺クベカラザルノ故ノミ、

天下萬國、文字各、其形ヲ異ニス、然レドモ皆法アラザルナシ、我ガ東洋ノ文字ハ、伏羲氏、書契ヲ造テ、結繩ノ政ニ代ヘシヨリ始マル、是ニ於テ、天下ノ義理ヲシテ、必ス文字ニ歸セシメ、天下ノ文字ヲシテ、必ス六書ニ歸セシメタリ、蓋シ古ヘ神聖、仰テ宇宙ノ大ナルヲ觀、伏シテ品類ノ盛ナルヲ察シ、能ク事物ノ理ヲ窮メテ以テ、此文字ヲ創製ス、然レドモ書契ハ、文字ノ理ヲ盡スモ、文字ノ體ヲ盡サズ、厥後チ、蝌斗、篆隷、相繼テ興リ、漢ノ代ニ至テ、漸ク楷、行、草ノ三體ヲナシ、文字ノ變ヲ極メ、萬世不易ノ基ヲ立テ、其法、亦從テ定マルヲ致シ、漢ノ蔡邕、之ヲ張芝ニ傳ヘ、張芝、之ヲ魏ノ鍾繇ニ傳ヘ、鍾繇、之ヲ晉ノ王羲之ニ傳フ、羲之ハ、書聖ニシテ、斯法ノ中興クリ、故ニ羲之ニ至テ、書法悉ク備具シ、執筆法ヨリ、點畫結構ノ試ニ至ルマテ、詳

新書院藏

カニ之ヲ辨說セザルナシ、是ニ於テヤ、東洋文字ノ萬國ニ冠絶スルコト、始メテ知ルベキナリ、我ガ朝ノ書ハ、文字渡來ノ時ニ起レリ然レ𪜈其筆蹟ノ今ニ存スル者ハ、推古天皇ノ頃ヨリ古キハナシ、其後、嵯峨天皇ノ時、學者始メテ晉唐ノ書法ヲ傳フ、是ヲ以テ、當時、書ヲ善クスル者乏シカラズ、前ニ三筆アリ、後ニ三蹟アリ、三筆トハ、嵯峨天皇、僧空海、橘逸勢ニシテ、三蹟トハ、小野道風、藤原佐理、藤原行成ナリ、空海逸勢ハ、純然タル唐人ノ風ナレ𪜈、道風以下ハ、稍自ラ我ガ國一體ノ風ヲ開ケリ、蓋シ書學ノ盛ナルヿ、前後ニ卓絶シ、筆迹ノ美ナル、迥カニ宋元ノ諸家ニ優ルモノ多シ、其日用ノ功至リテハ、草ヲ略シテ平假名トシ、楷ヲ省イテ片假名トスルモノ、乃チ變化ノ法ヲ極メ、活用ノ妙ヲ致スヿニシテ、書法ニ精熟スルニ非ザルヨリハ、爲ゾ能ク此ニ到ンヤ、是レ猶、篆ヲ省イテ隷ヲ作リ、楷ヲ略シテ行ヲ作ルト相同シ、行成出テヽヨリ、子孫累世、書ヲ能クシ、世、之ヲ世尊寺流ト稱ス、世尊寺流絶ユルニ及ビテ、持明院家ニテ其法ヲ傳フ、伏見天皇ノ皇子、青蓮院尊圓

新書院藏

親王、頗ル才藝アリテ、寂モ書ニ妙ヲ得タレバ、朝野ノ書法、是ニ於テ一變セリ、是ヲ青蓮院流ト稱シ、又御家流ト稱シテ、後世盛ンニ之ヲ學ベリ、是ヨリ後、名家多シト雖モ、漸ク支那人ノ書風ト相遠ザカリテ、益、我ガ邦ノ一體ヲナセリ、德川氏ノ始メ、近衛信尹、能書ヲ以テ名アリ、是ヲ三貌院流ト云フ、時ニ本阿彌光悅、瀧本坊昭乘ト、共ニ三筆ト稱セリ昭乘ノ門人ニ、大橋長左衛門ト云フ者アリ、是ヲ大橋流ノ祖トス、德川幕府ノ用ヰル所ハ、多クハ此流ナリ、又藤木敦直、佐々木志津磨アリ、持明院流ナリ、是等ハ概ネ舊套ヲ脫セザルモノナレ氏、能ク書法ノ蘊奥ヲ窮メ、行體ト、草體トノ間ヲ取リテ、讀ミ易ク、書キ易キ、一種ノ體ヲナス、是レ世ニ謂ユル國字ニシテ、俗、唐樣ニ對シテ倭樣ト稱スルモノ是ナリ、近世、阪川暘谷出デヽ、青蓮院流ヲ學ビ、頗ル其法ニ巧ミナレバ、其門葉モ多ク、其流當世ニ盛ナリ、然ルニ近時、唐樣ト稱スル書風ノ流行セシヨリ、國風ノ字體書法ハ、漸ク衰頽シテ、時行ニ適セザルニ至リシハ、實ニ惜ムベキコトナリ、余ノ如キモ、家ニ傳ヘタル御家

流ヲ棄テ、晉唐ノ餘派ヲ汲ミ、一意其法ヲ唱ヘシガ、近來、大ニ感ズル所アリテ、舊說ヲ一變シ、專ラ本邦固有ノ書風ヲ振起セン1ヲ主張セントス、

サテ我ガ邦ニ於テ、唐樣ト稱スル者ハ、細井廣澤ノ出ルニ及ビ、始メテ盛ナリ、廣澤ハ、眞行草ノ外ニ、篆隸ヲ能クシ、諸體ヲ兼ネタリ、又同時ニ、滝見玄岱、林道榮アリ、並ニ能書ヲ以テ聞ユ、繼テ澤田東江、滝川親和等出テ、古法帖ヲ學ビ、專ラ書ヲ以テ業トシ、諸體ヲ兼ネテ、書家ト稱セリ、然レドモ

近時、卷菱湖、市河米菴出ルヤ、世人爭フテ其流ヲ學ベリ、菱湖ハ、篆隸、楷行草諸體ノ外、殊ニ國風ノ假字ニ妙ヲ得タリ、故ニ我ガ邦ノ書ハ、菱湖ニ至テ、其精美ヲ致セリ、

抑モ書道ハ、六書ヲ講ズルヲ以テ、其要トス、サレド、我ガ云フ、六書ハ、指事、象形、轉注、假借等ノ六法ニアラズ、古文、篆書、佐書、蟲書等ノ六書ニ倣ヒ、現今普ク用ヰル所ノ、篆書、隸書、楷書、行書、草書及ビ、國字ノ六體書ヲ指シテ謂フナリ、

我ガ國ノ書學ハ、支那ノ字ヲ學ベルガ故ニ、古ヘ

書博士アリ、其生徒ニ教ヘシハ必ズ唐風ノ書ナル丁著シ、然リト雖モ、凡ソ童子ニ書ヲ教フルハ、其初メ何物ヲ授ケシヤ詳カナラズ、假名起リテハ、難波津、淺香山ノ二歌ヲ授ケ、且ツ平假名ノ前ニ、片假名ヲ授ケシガ如シ、後ニ平假名ノ伊呂波ヲ授ケテ、之ヲ假名手本ト云ヘリ、其レヨリ行書、草書ヲ授クル丁、習字ノ順序タル疑フベカラザルニ似タリ、爾來、眞書ハ、儒家、佛徒ノ外、多ク學バザリシガ、唐樣風ノ書行ハルヽニ及ビ、晉唐ノ書法ニ準ヒ、古法帖ヲ模本トセシヨリ、眞書ヲ學ブヲ以テ先トナスニ至レリ、

古人曰ク、石刻必ズ學ブベカラズ、米元章又曰ク、自ラ書シテ自ラ刻スト雖モ、石刻已ニ吾ガ書ニアラズト、夫レ是等ヲ以テ石刻ノ文字ハ、形ノミニシテ、精神既ニ脫スル丁、猶彼ノ蛇蛻蟬蛻ノ如ク、又枯魚乾菌ノ如キ丁ヲ知ルベシ、首尾鱗目ハ、備ハリ具ハルト雖モ、其活機既ニ之レ去レリ、今人書ヲ學ブニ、此枯魚ヲ本トシテ、其活躍ヲ求メバ、猶彼ノ蟬蛻ヲ見テ、其飛ビ且ツ鳴カンコトヲ望ムニ均シ、將タ何ヲ以テ其眞ヲ得ベケンヤ、然

ルニ輙モスレバ、羲之ヲ能クシ、獻之ヲ能クスト云フモ、世人我ガ邦古名家ノ真蹟ヲ見テハ、其妙ヲ知ルヿ能ハズ、斯ノ如キ人ハ、必ズ刻シテ後、始メテ其絶妙ノ品題ヲ吐カン、蓋シ刻本ニ溺レテ、真蹟ヲ見ルコトナク、死物ヲ見テ、生物ヲ知ラザルニ坐スル故ナリ、豈笑フベク歎ズベキノ至リナラズヤ、故ニ止ムヲ得ズ、墨帖ヲ以テ、模本トナサバ、彼ノ枯魚蟬蛻等ノ形似ヲ採ルモ、必ス外ヨリ活神ヲ加ヘテ以テ學バザルベカラズ、

又文字ヲ習フニ、初メハ極メテ大ナラサルモ、極メテ小ナルベカラズ、蓋シ小字ニ善キモノハ、必ズ大字ニ拙シ、深ク小楷ヲ學ブハ、甚ダ書學ニ害アリ、遂ニ其妙ニ通ゼザルノ基トナルヲ以テナリ、然リト雖モ、楷法ヲ學ビ得テ、而シテ後、兼テ小字ヲ能クスルニ至ラバ、兩端其全キヲ得ルト謂フベシ、故ニ模本ニ足ルベキ文字ハ、必ズ二寸以上ニ限ルト知ルベキナリ、然ラバ則チ、中庸ヲ得タル優美溫雅ノ書體ヲ撰ビ、字形法格ヲ正シテ、切瑳琢磨ノ功ヲ積ムヿ、豈啻ニ斯學ノ捷徑ノミナラズ、經世ノ用具ト、東洋ノ美術トヲ速成スル

ニ庶幾ラン乎、

執筆法

筆ヲ執ルノ法ハ、書ヲ學ブノ正路ニシテ、是ニ因テ學バザレバ、假令、終身斯學ニ從事スト雖モ、決シテ其妙ニ達スル能ハズ、況ンヤ幼時一トタビ指法ヲ誤ルニ於テヲヤ、其習ヒ性トナリ、終ニ惡癖ヲナシテ、復ビ改ムベカラザルニ陷ルハ、抑モ深ク戒ムル所ナリ、故ニ書ヲ學ブ者ハ、執筆ヲ以テ先トナス、執筆法ヲ得テ、點畫波擊、始メテ其正シキヲ得ルナリ、

執筆ノ法ハ、第一大指ノ節外、第二雙鉤、食指中指ノ節外、第三名指ノ爪下、第四小指名指ヲ拒ス、第五五指結實、第六執筆逮近、第七撥鐙、是レヲ指法ト謂フ、第八懸腕、是レヲ腕法ト謂フ、第九虛掌握卵、第十直管正鋒、是レヲ手法ト謂フ、此十ノ者、全キヲ得テ、執管ノ能事、始メテ具ハルヲ致ス、

第一大指ノ節外トハ、筆管ヲ大指ノ節外ニ置クヲ謂フ、

第二雙鉤、食指中指ノ節外トハ、筆管ヲ食指中指ノ節外ニ於テ苞持シ、二指筆管ニ懸ルヲ以テ雙

鉤ト謂フ、

第三名指ノ爪下トハ、筆管ヲ名指ノ爪下ニ置キ、中指ト相抵拒シテ、爲メニ筆管ノ定固スルヲ謂フ、

第四小指名指ヲ拒ストハ、小指ヲ名指ニ添ヘ、力ヲ助ケテ名指ヲ拒クガ如クナルヲ謂フ、

第五五指結實トハ、五本ノ指共ニ空隙ナク、相須テ相離レズ、互ニ相助ケテ、指ニ自然ノ力ノ入ルヲ謂フ、

第六執筆遠近トハ、眞書ハ小密ヲ主トス、故ニ宜シク筆鋒ニ近カルベク、行書ハ寛縱ヲ旨トス、故ニ稍遠カルベク、草書ハ流逸ヲ尚ブ、故ニ宜シク更ニ遠カルベシ、總テ眞行草、其體ニ從テ、筆ヲ執ルニ遠近ノ法アルヲ謂フ、

第七撥鐙トハ、撥ハ挑ナリ、鐙ハ燈ナリ、燈ヲ挑ルニ喩フ、而シテ此法タル、五指各主ル所ノ用ヲナシ、字ヲ作ルニ及ンデ、運筆ノ妙ヲ盡スヲ謂フ、

第八懸腕トハ、五指各結實シ、從テ腕ヲ伸ベ、空中ニ懸ル如クナレバ、自ラ全身ノ力ヲ盡シ得ルヲ謂フ、

第九虛掌握卵トハ、既ニ筆管ヲ大指ノ節外ト、食指中指ノ節外、及ビ名指ノ爪下トニ置ケバ、掌中ハ自ラ空虛ヲナシ、恰モ卵ヲ握ルガ如クニシテ、運用自在ナルヲ謂フ、

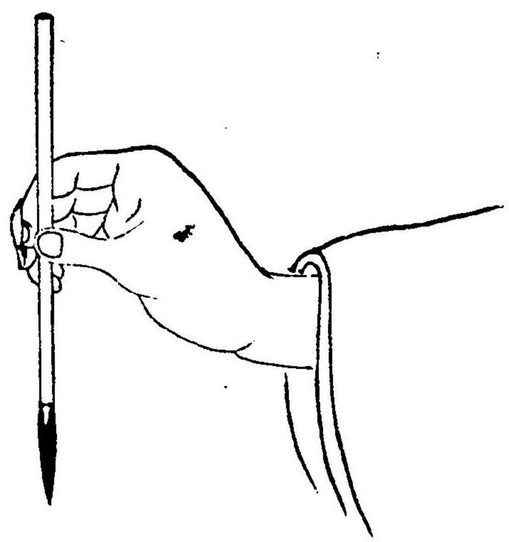
第十直管正鋒トハ、指法ト腕法ト、既ニ定マレバ、筆管ヨリ筆鋒ニ至ルマデ、自然ニ直立スルヲ謂フ、

已ニ能ク、執筆ノ正法ニ依レバ、點畫結體、宜シキヲ得テ、字々端正ナラザルナク、意ノ之ク所ニ隨テ、滯礙ナキニ至ルベキナリ、而シテ法ハ撥鐙懸腕ヲ以テ上トナス、平覆及ビ几ニ就ク者之ニ次グ、又左手ヲ以テ右手ノ枕トスルモノアリ、之ヲ枕腕ト謂フ、蓋シ几ニ就クトキハ、則チ指寛展セズ、强テ懸腕ヲナストキハ、又勢ヒ多クハ散漫スルヲ免レズ、故ニ枕腕ヲナシテ、懸腕ノ漸トナス、殊ニ小楷及ビ我ガ國字ヲ書スルニ於テハ、須ラク此法ニ依ラザルベカラズ、然リト雖モ大字ト行草トニ至テハ、必ズシモ懸腕平覆ノ二法ニ循フベシ、又筆ヲ執ルニ異法ノ者アリ、蓋シ惡癖タルヲ免レズ、深ク戒メザルベカラザルナリ、

執管正法

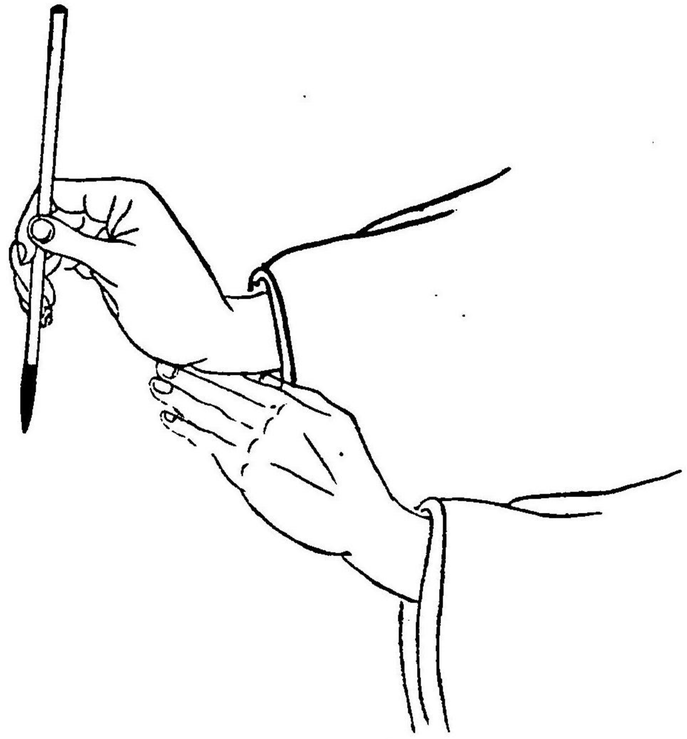
平覆法

雙鉤雙挑、腕ヲ平ニシ、掌ヲ覆ヒ、指ヲ寔ニシ、拳ヲ虛クスルヲ謂フ、宜シク運用ノ時ノ若キニ至テハ、亦當ニ撥鐙ノ法ヲ參用スベシ、然ルトキハ其妙加フルナシ、



單鉤枕腕法

單指ヲ以テ筆管ヲ苞ミ、左手ヲ以テ右手ノ枕トナス、是ヲ單鉤枕腕法ト謂フ我ガ國字假名ヲ書スルニハ、此法ニ從フベシ、



體製論

今世、普ク用ヰル所ノ真、行、草ハ、其法皆蟲篆、八分、飛白、章草等ニ源ク、故ニ圓勁古澹ハ、則チ蟲篆ニ出デ、點畫波發ハ、則チ八分ニ出デ轉換向背ハ、則チ飛白ニ出デ、簡便痛快ハ、則チ章草ニ出ヅ、然リ而シテ真草ト行トハ、各體製アリ、是レヲ以テ、古人專ラ真書ニ工ミナル者アリ、專ラ草書ニ工ミナル者アリ、專ラ行書ニ工ミナル者アリ、信ナル哉、其美ヲ兼ヌル能ハザル乎ト、何ゾ言ノ謬妄ナル、真モ書ナリ、草モ書ナリ、行モ亦書ナリ、體製各

異ナリト雖モ、真ヲ善クシテ、行ヲ善クセズ、行ヲ善クシテ、草ヲ善クセザルノ謂アランヤ、蓋シ此ノ如キハ、未ダ斯道ニ精密ナラザルニ因レリ、特ニ我ガ邦ニ於テハ、國字假名ノ意態用筆ヲ説クヲ以テ先トナサヾルベカラズ、是レ余ガ總論ニ於テ、六書ヲ講ズルヲ以テ、書學ノ要ナリト論ゼシ所以ナリ、

篆書

篆隷ハ、文字ノ本ナリ、故ニ苟モ書ヲ作ラント欲セバ、宜シク篆隷ニ通ゼザルベカラズ、故ニ篆法ニ通ズレバ、則チ字體差ルナシ、隷法ニ通ズレバ、則チ用筆則アリ、此レヲ以テ、文字ノ篆書ニ基スル知ルベキナリ、

篆書ニ三要アリ、一ニ曰ク圓、二ニ曰ク瘦、三ニ曰ク叅差是レナリ、圓ナレバ乃チ筆力遒勁、瘦ナレバ乃チ字形膏腴、叅差ナレバ乃チ結體整齊、此三ノ者、其一ヲ失フトキハ、奴書タルヲ免レズ、

凡テ篆ハ、長形ヲ善シトス、然レモ太ダ長カルベカラズ、太ダ長ケレバ、則チ法アリテ法ナシ、故ニ宜シク、楷字ノ一半ヲ以テ度トナシ、一字ヲ以テ

正體ヲ作リ、半字ヲ以テ垂脚ヲ作レバ、豈善ヲ盡シ、美ヲ盡サズト謂フヿナシ、

篆ヲ作ル、肥瘦均一、轉折稜角ナキヲ法トス、故ニ其初メヤ未ダ用ヰザルノ時ニ於テ、筆頭ヲ略、燈上ニ燒過シ、禿シテ以テ用ウト、是レ蓋シ、上古筆アルモ殆ント竹管毛ヲ求ムルニ過ギザルヲ以テノ時ノ謂ナリ、今ヤ乃チ平筆ヲ以テ篆ヲ作ル、轉運難シト雖モ、字形自ラ膏腴ニシテ、優美ノ觀ヲナス、之レ斯技ノ進歩シタル所以ナリ、

隸書八分

小篆散ジテ八分生ジ、八分破レテ隸書出ヅト、即チ漢隸ナリ、隸ナル者ハ、彼ニ分ノ體ヲ變ジ、且ツ準尾ノ筆法ヲ轉ジテ、海波洋動去來ノ勢ニ擬シ、此體ヲ作ルト云フ、而シテ隸ヲ書スルノ筆法ヲ擊石波ト謂フ、此レ則チ海波ノ石ヲ擊ツ勢ヲ取ルヲ以テナリ、故ニ隸法ハ、擊石ニ因ルノミニシテ、篆ノ長キニ反シ、平扁ナルヲ法トス、

八分ノ書ハ、龜ノ泥土ヲ行クヲ見テ製スルト云フ、故ニ其筆法ヲ準尾ト稱ス、蓋シ龜尾ニ準ズルヲ以テナリ、其字體、或ハ曰フ、大篆八分ヲ去テ、二

分ヲ取リ、小篆二分ヲ去テ八分ヲ取ルト、或ハ謂フ、小篆八分ヲ去テ、二分ヲ取リ、秦隷二分ヲ去テ、八分ヲ取ルト、二説共ニ據ナキニ非ズト雖モ、其至所ハ、隷法ニ篆筆ヲ交ルヲ以テスルノミ、

楷書

眞楷ハ、是レ書ヲ學ブノ正歩、故ニ苟モ眞楷ヲ學バザレバ、草行、瀟灑縱横ナルモ、神逸道勁ナル能ハズ、此レヲ以テ、草書千字ハ、行書ノ十字ニ抵ラズ、行書ノ十字ハ、眞書ノ一字ニ如カズト謂フ言アリ、之レ蓋シ草ハ至テ易クシテ、眞ハ至テ難キヲ教フルノ謂ナルベシ、又曰ク、草書縱横揮灑スルモ、觀ル者以テ易シトナス、眞書一筆苟モセズ、觀ル者以テ難シトナス、然ラバ則チ、眞書ノ難キ知ルベキナリ、況ンヤ書ノ法、皆楷體ニ具ハルニ於テヲヤ、

楷書ハ、筆ヲ執ル、妙虛掌ニアリ、腕ヲ運ラス、太ダ緊ナルベカラズ、緊ナレバ則チ腕轉スル能ハズ、既ニ腕轉ゼザレバ、則チ字體或ハ粗、或ハ細、上下均シカラズ、爲メニ多ク力ヲ用ヰルト雖モ、規ニ應ジ、矩ニ入ル能ハズ、復タ筆ヲ用ヰル、自ラ八法

アリ、曰ク、點ハ字ノ眉目、全ク顧眄精神ニ籍ル、向アリ背アリ、字ニ隨テ形ヲ異ニス、横直ノ畫ハ、字ノ體骨、起アリ止アリ、貴ブ所ハ長短宜シキニ合フナリ、結束堅寔ノ〻ハ、字ノ手足、伸縮度ヲ異ニス、故ニ變化端多シ、是レ猶魚翼鳥翅、翩々自得ノ狀アルガ如シ、乚フハ、字ノ步履、或ハ斜拂ヲ帶ビ、或ハ横引外ニ向ヒ、正鋒之ヲナス、正鋒ナレバ、則チ飄逸ノ氣ナシ、轉折ハ方圓ノ法、眞ハ多ク折ヲ用ヰ、草ハ多ク轉ヲ用ウ、故ニ眞ハ轉ヲ以テ、而シテ後ニ道、草ハ折ヲ以テ、而シテ後ニ勁ナリ、懸針ハ、筆極メテ正シカランヲ欲ス、上ヨリ而シテ下ル、端ハ繩ヲ引クガ如ク、垂ルヽガ如クニシテ、而シテ復タ縮ムアリ、之ヲ垂露ト謂フ、垂ルヽトシテ縮セザルナク、往クトシテ收メザルナシ、此ノ如クナレバ、必ズ至精至熟、妙絶極リナキニ達スベキナリ、

行書

行書ノ世ニ於ケル、六書中ニ在テ、最モ知リ易ク、行ヒ易シトナス、故ニ之ヲ行書ト謂フ、

行書ノ體タル、大率、眞ヲ變ジテ揮運ニ便スト雖

モ、自ラ定體アリ、上以テ眞ニ通ズベク、下以テ草ニ通ズベシ、而シテ其眞ヲ兼ル者ヲ、眞行トナシ、草ヲ帶ル者ヲ、草行トナス、抑モ眞ハ、書ノ正ナリ、草ハ、書ノ變ナリ、行ハ則チ正變ノ間ニ在テ、而シテ正變ヲ兼ネ行フ、是ニ於テヤ、運筆ノ難キ知ルベキナリ、

夫レ書ノ行アル、猶人ノ行アルガ如シ、故ニ端行度アリ、時行容アリ、何ゾ唯、周旋規ニ中リ、折旋矩ニ中ルノミナランヤ、大抵、字ヲ作ル、結構體勢、亦皆態ニ取ル、方圓疎密ノ如キ、意ニ任シテ塗出スレバ、則チ立ツ者行テ、而シテ行ク者走ル、是ノ如クナレバ、乃チ爲ゾ行書タルニ在ランヤ、行書論ニ曰ク、楷法ヲ以テ行ヲ作レバ、則チ太ダ拘ス、草法ヲ以テ行ヲ作レバ、則チ太ダ縱ス、故ニ拘束セズ、放縱ナラズ、瀟洒縱横、濃纖中ヲ得、高下度ニ合ヒ、初メテ行書ヲナス、

草書

草書ノ體タル、人ノ坐卧行立シ、揖讓忿爭シ、舟ニ乘リ馬ヲ躍ラシ、歌舞擗踊スルガ如シ、故ニ神機靈活ヲ以テ要トス、用筆ニ拗セズ、結體ノコト、抑

モ又次ギナリ、然リト雖モ結體其法ニ則ラザレバ、乃チ亦草書ヲナサズ、故ニ凡ソ草書ヲ學ブ者ハ、須ラク結體ヨリ入ルベシ、

草書ヲ作ル、用筆緩アリ急アリ、鋒アルアリ、鋒ナキアリ、上字ヲ承接スルアリ、下字ヲ牽引スルアリ、乍チ徐、還タ疾、忽チ往、復タ收、緩ハ以テ古ヲ效シ急ハ以テ奇ヲ出ス、鋒アリ以テ其精神ヲ耀カシ、鋒ナクシテ以テ其氣味ヲ含ム、横斜曲直、鉤環盤紆、皆勢ヲ以テ生トス、然レドモ亦相帶スルヲ欲セズ、帶スレバ則チ俗ニ近シ、横畫太タ長キヲ欲セズ、長ケレバ則チ轉換遲シ、直畫太タ多キヲ欲セズ、多ケレバ、則チ神癡シ、既ニ精熟此ニ至レバ心手相應シテ、筆勢活動シ、遂ニ正變兩端ヲ竭シ、悠然トシテ運用ノ妙ヲ自得シ、怪虬ヲ毫端ニ舞シ、神龍ヲ箋面ニ走ラサン、是ニ於テ乎、草書ノ法要、復タ論ズルニ及バズ、

國字

青蓮院、又ハ持明院家ニテ傳フル所ノ書流ヲ稱シテ、御家流ト謂フ、是レ則チ謂フ所、國字體ノ一ナリ、蓋シ總論ニモ説キシ如ク、行體ト草體トノ

間ヲ取リテ一種ノ字體ヲナセルモノニシテ、全ク唐風ノ書ト異ナレバ、國字トハ稱セルナリ、此書流漸ク多ク、上代ヲ始メトシテ、伏見流、後京極流、定家流、尊圓流、又御家流ト稱シテ、其流相派レテ、尊應流、尊鎮流、尊朝流、尊純流、尊澄流トナリ、又敕筆流、後栢原院流、世尊寺流、通村流、堯孝流、飛鳥井流、二樂流、尚通流、近衛流、三條流、宗祇流、堺流、宗鑑流、光悅流、大橋流、鳥養流、傳内流、加茂流等アリト雖モ、後世家モ行ハルヽモノハ、乃チ御家流ナリ、故ニ青蓮院、持明院家ニテハ、筆道ノ口傳ト稱シ、運筆及ビ各種ノ書法ヲ秘シテ、之ヲ入木道ト稱ス、其書世間ニ存スル入木抄、夜鶴抄、才葉抄等ニ潤色シテ、之ヲ人ニ示サズ、然レドモ其眞面目ヲ見ルベキモノハ、上ノ三書ニ出デザルノミ、

抑モ斯流ニテ、第一ノ秘法ト云フハ、十二筆法、四品、伊呂波假名ノ書キ方ナリ、十二筆法トハ、平、直、均、密、鋒、力、輕、潔、補、損、巧、稱ニシテ、四品トハ、筆開、筆足、筆結、筆納是ナリ、又六十八點、七十二點等ノ法アリト雖モ、要スルニ十二筆法、四品ノ悉シキニ過ギザルヲ以テ、敢テ採錄セズ、

永字法

凡ソ書ヲ學ブ者ハ、筆法點畫ヲ明ニスルヲ以テ先トナス、筆法點畫、八體永字ニ備ハル、故ニ永字ノ八法、之ヲ墨道ノ要訣トス、是レ則チ萬字ヲ該ルヲ以テナリ、

新書院藏

側ハ筆ヲ平ニスルヲ得ズ、右ヲ顧テ筆ヲ落スベシ、是レ點ニ非ザルヲ以テナリ、

勒ハ筆ヲ卧スヲ得ズ、中高ク兩頭下ク、筆ヲ趯ラシテ行ク、是レ畫ニ非ザルヲ以テナリ、

努ハ筆ヲ直ニスベカラズ、直ナレバ力ナシ、筆ヲ立テ左偃シテ、徐カニ下スベシ、

趯ハ鋒ヲ蹲シ、勢ヲ得テ而シテ出スベシ、勢勁ナラズ、筆挫ガザレバ、意深カラザルナリ、

策ハ斧ノ物ヲ斫ルガ如シ、兩頭高ク、中筆心ヲ以テ之ヲ擧グベシ、

新書院藏

掠ハ筆鋒左出シテ而シテ利ナルベシ、筆趣留ラントシテ、疾ク行ク、是レ此法ナリ、

啄ハ鳥ノ物ヲ啄ムガ如シ、筆ヲ立テ下ヲ卷フ、勢ヒ宜シク左ヨリ右ニ向フベシ、

磔ハ徐ナラズ、疾ナラズ、其勢ヒ右ニ出デントシテ、復タ駐メテ而シテ之ヲ去ルベシ、

用筆法

夫レ書ノ體タル、專執スベカラズ、用筆ノ勢タル、一槩スベカラズ、心ハ古ニ法ルト雖モ、制ハ當時ニアリ、大凡ソ筆ヲ用ル緊ヲ欲シ、筆ヲ運ラス、活欲ス、運用指ヲ以テスベカラズ、當ニ腕ヲ以テスベシ、又筆ヲ用ル手ニアリ、手ハ運ヲ主トセズ、之ヲ運ラス腕ニアリ、腕ハ用ヲ主トセズ、既ニ手腕相應ズレバ、則チ筆正シ、筆正シケレバ、則チ鋒藏ル、筆偃セバ則チ鋒出ヅ、一起一倒、鋒ノ常ニ畫中ニアランヲ欲スレバ、則チ一點一畫、芒稜ヲ泯シテ、寬閑圓美ナラザルナシ、

意筆前ニアリ、字心後ニ居ルト、宜ナル哉、言乎、故ニ苟モ中行ヲ得ザレバ、其工ミナランヨリハ、寧ロ拙、其弱ナランヨリハ、寧ロ勁、其鈍カランヨリ

ハ、寧ロ速、然レドモ極メテ俗姿ヲ淘洗スレバ、則チ妙所自ラ見レン、

凡ソ書ハ、第一用筆、第二識勢、第三畏束、三ノ者兼ネ備ハラザレバ、法書トナスベカラズ、而シテ用筆ハ、豈ニ偏倚向背ニ止ラン、其要蹲馭起伏ニアリ、識勢ハ、豈ニ散水烈火ニ止ラン、其要權變改製ニアリ、畏束ハ、豈ニ虚實展促ニ止ラン、其要互出ニ歸ス、此三ノ者ヲ曉レバ、則チ始メテ書ト謂フベシ、抑モ用筆ノ法タル、詳密ヲ欲スレバ、愈〻詳密ナルヲ以テ、其大要ヲ述ブルニ過ギズ、

横畫ノ

右ヨリ左ヲ搶キ
筆鋒右ノ上ニ收
マル

竪畫ノ

下ヨリ上ヲ搶キ
筆鋒下ノ左ニ收
マル

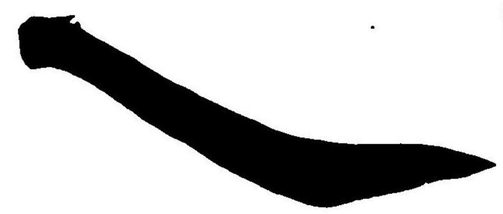
點ノ

筆鋒點中ニ收マル

或ハ

筆鋒點中ヨリ出ル

波勢ノ
揭ケ出
ス



撇ノ鋒勢ヲ落サヾル

凡テ收マルモノ、出ルモノ、駐マルモノ、皆末鋒ノ端、眞直トナリ、倒レズ偃サズ、前後左右ニ通ジ、氣脈聯屬、滯フル所ナケレバ、垂トシテ縮マラザルナク、往トシテ收マラザルナシト謂フ地位ニ至

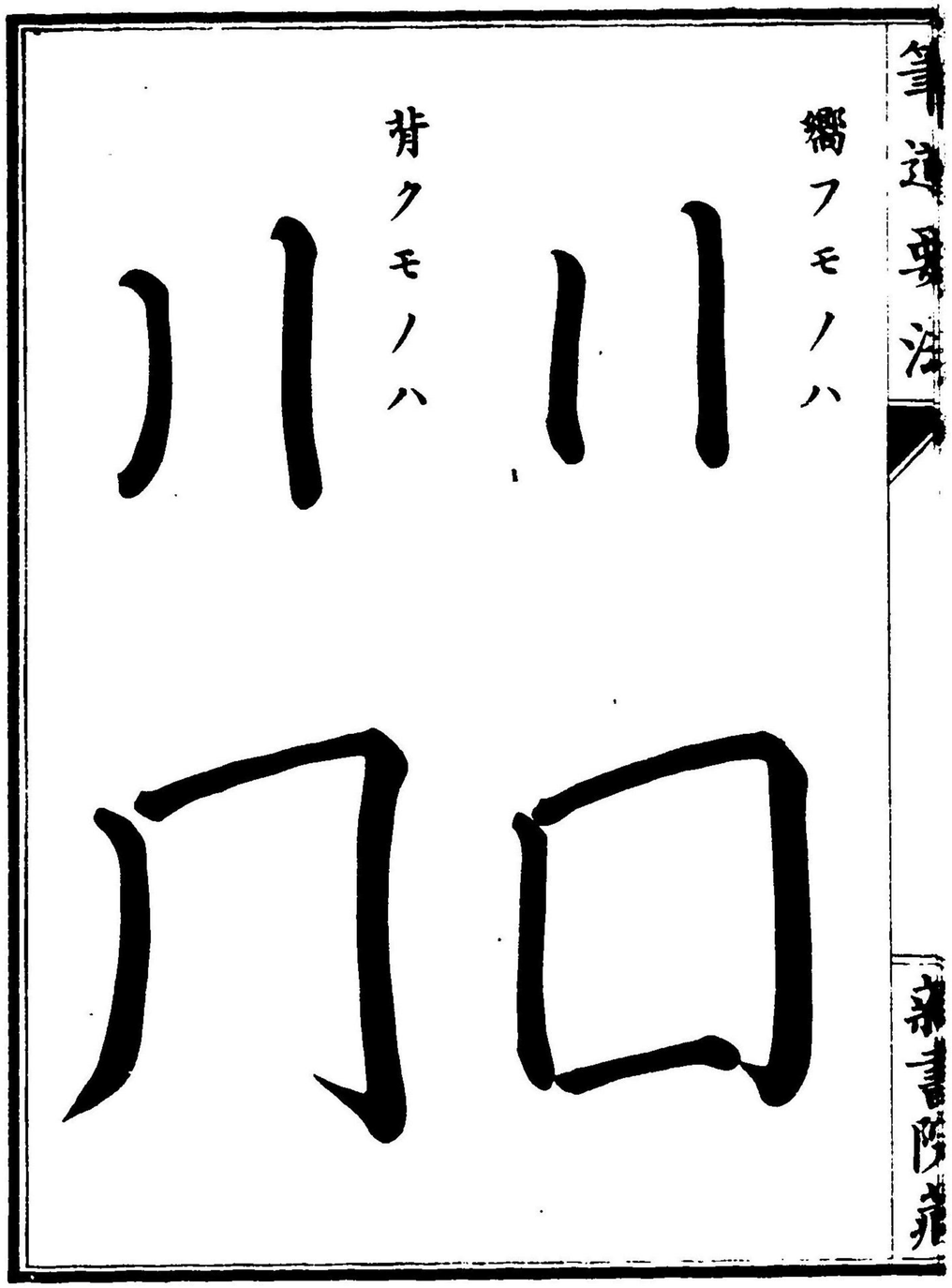
ルベシ、

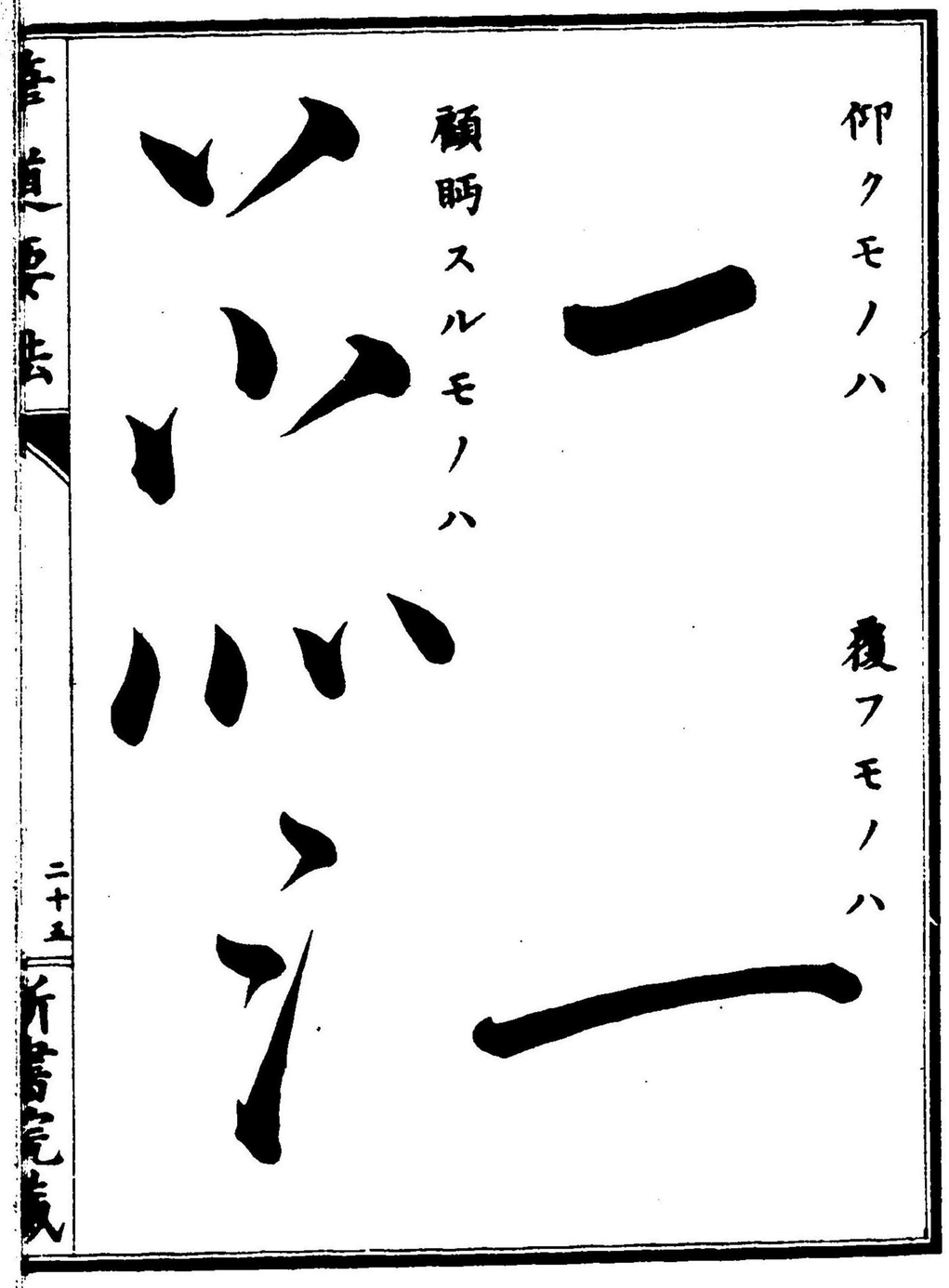
既ニ習熟此ニ至レバ、其所習ノ氣象ヲ挹ルニアリ、サテ風韻トハ、俗ニ匂ヒト云フ1ニテ、前述ノ衆巧悉ク備ハリ、得テ謂フベカラザル妙處アルヲ謂フ、之ヲ喩フレバ、猶名劍ニ匂ヒアルト云フガ如シ、然ルヲ習俗輙モスレバ、風韻氣韻ト稱シテ、用筆ノ大要ヲモ攷窮セザルハ、抑モ又上達ノ途ヲ塞グト謂フベキナリ、

結體法

凡ソ字ヲ作ル、筆力ハ點畫ノ間ニアリ、調匂ハ空隙ノ地ニアリ、故ニ須ラク一筆モ苟モスベカラズ、況ンヤ其要緊ノ所、疎ニ失スベカラザルニ於テヲヤ、之ヲ喩フルニ字ノ大體ハ、屋ノ墻壁ニ於ルガ如シ、墻壁既ニ毀壞ス、安ンゾ紗窻牖戸ヲ問ハン、初學一點ハ、一字ノ規ヲ成シ、横直安置、對待布白ヲ以テ、大體ヲ作ルヲ知ラザレバ、獨一點所ヲ失フノミナラズ、勢モ亦自ラ失フニ至ル、是レ猶美人ノ一目ヲ病ミ、壯士ノ一股ヲ折ルガ如シ、要スルニ結字ノ法ハ、點畫ノ顧眄、嚮背、仰覆ヲ詳察スルニアリ、

新書院藏


嚮フモノハ
背クモノハ


仰クモノハ
顧眄スルモノハ
復フモノハ

ノ類ハ併目ノ如ク、分ハ抵背ノ如ク、一二其理ノ反クベカラザルモノアリ、又廻避トテ、重複ヲ避クルアリ、及廬ノ重撃ヲ廻ケ、炎途ノ重拂ヲ避クルノ類ナリ、

及

廬

上撃ノノヲ硬撃ト云ヒ、下撃ノノヲ腕撃ト云フ、

炎

途

上ハ捺ヲ用ヰ下ハ波ヲ用ウ

及

廬

炎

途

此ノ如クナスベカラザルヲ謂フ、又變通ノ理、具狀スベカラザルモノアリ、其一端ヲ謂ヘバ、

火

兩點トモニ中正ヲ宜シトス其重ナルモノ

炎

字ノ如キ、上擎ハ、頭高ク下縮ミ、下擎ハ、頭低ク下展ブ、又左右ニアルモノハ、

秋

火字ノ右點稍遠カルベク

灼

火字ノ左點稍遠カルベシ又

剡

或ハ

淡

ノ如キ

重ナルモノト、左右ニアルモノトノ法ヲ兼ネ用ウ、又其三合ナルモノ

炊

字ノ如キハ、上下左右ノ法ヲ兼ネ用ウ、是等ハ必ズ此クノ如クスベシト謂フニアラズ、只其一端ヲ掲ゲ大要ヲ示スノミ、

宮川刷刷

新書院藏

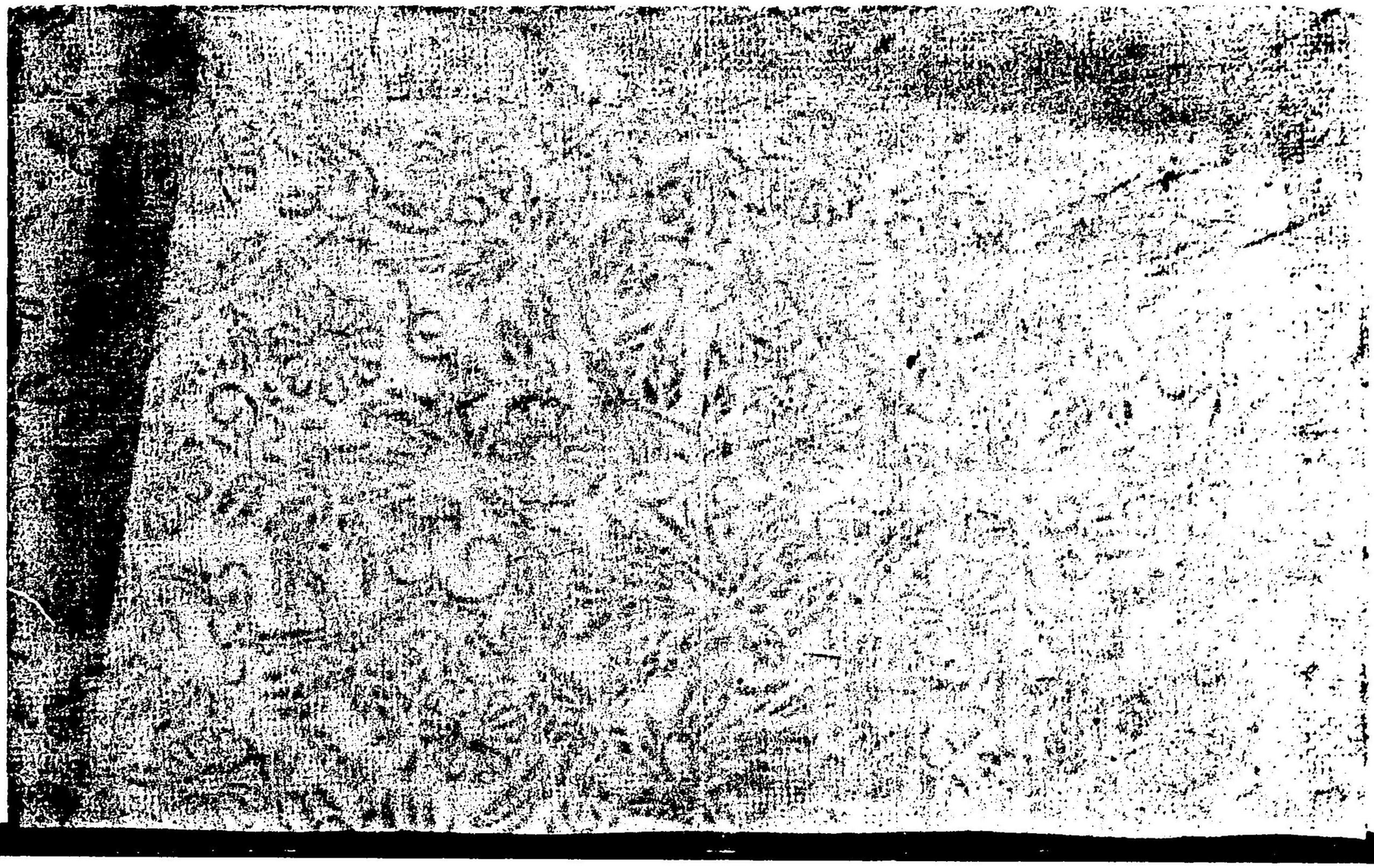
明治二十六年二月二十五日印刷
同　二月二十七日出版

定價金拾八錢

著者　神奈川縣平民　原田眞一　東京市浅草區榮久町二十二番地

發行兼印刷人　愛知縣平民　勝峰惠滿　同日本橋區吳服町二十八番地

東京市日本橋區吳服町二十八番地　新書院

愛知縣名古屋市玉屋町四丁目　鬼頭平兵衛

大賣捌所